

わが精神史の試み

— 三冊の本を巡って —

小松義弘

三冊の本との巡り合いは、これまでに触れた、いろんな本のなかでも、特に印象に残っている。これらの本について語ることは、ひいては、私の精神の歩みを語ることになるであろう。私の精神の歩みといっても、誇らかにいうことは、なにひとつないけれども、壁に突き当たりながら生きてきた、ひとりの男の記録にはなるであろう。

三冊の本とは、

アルベール・カミュ「ジジフォスの神話」(矢内原伊作訳) 新潮文

庫 昭和二十九年十一月十五日

森有正「遙かなるノートル・ダム」(「展望」昭和四二年二月号)

内田義彦「社会認識の歩み」岩波新書 昭和四六年九月三十日

である。

ところで、「ジジフォスの神話」に出会うまでのことを、簡略に書いておこう。

昭和二十年六月、私が生まれた軍港・佐世保の街は、空襲で一夜のうちに灰になり、わが家も例外ではなかった。その空襲のとき、雨の中を、落とされた焼夷弾の破片で足が傷ついた私をおぶって、母は兄たちを連れ、実家のある、佐賀県相知の田舎に帰ってきた。

それから、母と兄は、父は戦地から帰ってこず、生活のめどを立てるのに、忙しかったはずだ。私の足の治療は長くかかった。私は、紙を見つければ、傷ついた足をひきずりながら、絵ばかり書いていた記憶がある。

戦争が終り、父が帰ってきて、私が小学校へ行くようになって、わが家の経済状態は変りなかった。わが家に本らしい本はなかった。小学校四年生のとき、私が足を骨折し、入院したおりに、「小学四年生」という雑誌をとってもらったことがある。

中学校二年生のとき、図書館が完成した。図書委員になり、書籍に触れる、なんともいえない喜びを感じていた。特に、新刊のペーヂを開くのは、密かな楽しみであった。「自分が読まないうちは、書架に並べないぞ」と気負い、遅くまで、講談社の世界名作や、偕成社の伝記を読んだ。日記をみれば、岩波書店の「芥川龍之介全集」第一巻を買っているのだが、今はどこにあるのだろう。

高校一年生のとき、新聞の新刊広告を見て、兄に買ってもらったのが、カッパ・ブックスの「欲望」(望月衛)であった。人間の争いや悩みは、すべて欲望に起因すると、単純に思っていたからである。この欲望を抑制すれば、争いや悩みはすべて解決するのではないか。少年の思いは飛躍する。断食するから、食事はいららないと言い、母

を驚かせたのもその頃であった。「欲望」という本は、そんな自分の思いとは、ずいぶんかけ離れた本であった。

しかし、その反面、谷崎潤一郎の作品を読み、性の問題から解放されることはなかった。あるいは倉田百三の「青春の息の痕」を読み、その霊の世界にあこがれた。また、武者小路実篤の「愛と死」に感動したり、石川達三の「轉落の詩集」を読み、そこに収められている「智慧の青草」の中の、「懷疑は懷疑を懷疑する」という語句が、今もなお、残っていたりする。

そして、私の内側では、求道的な自分と、現実の自分の姿との乖離が起り、それは埋め難いものとなっていた。高適とも思える高みから、現実の自分の姿を見、その醜惡卑小な姿に、自己嫌惡に陥っていた。

そんな状態で、私は高校を卒業し、いつかは大学へ行こうと、密かに思い、就職し、家を出た。

2

『シジフォスの神話』の裏表紙に、「一九六〇・三・三二〇回目の悲劇的誕生日、渋谷にて」と記している。

渋谷駅前の書店で買ったのであるが、この本を買うために行ったのではない。たまたま、たくさんの本のなかから見いだしたのである。今でははっきりしない。この本に出会う前までは、カミュの名も、不条理も実存も知らなかった。

日記帳を見ると、——なんとも恥ずかしい思いがするのだが、勇気を出して——三月三日には記入してなくて、三月五日に次のよう

に書いている。

「例の映画を見て以来、僕はある病氣にとりつかれた。今、それに命名しよう、*虚無病*、*曲り角病*」と。

三月三日の我が誕生日は、多摩川の岸で過した。もちろん欠勤だ。なんとという誕生日。二十年間も生きてきた。しかし、何をし、何を残し、生きて来たのだろうか。過去なんて無だよ。ただ生きて、この地球上に生存して来たまでだ。」

例の映画とは、フランスの若者の生態を描いた「危険な曲り角」という映画である。ある純情な少年が、不良グループのなかの少女に恋をする。不良グループは、何も信じてはいない。信じているとすれば、自分の肉体と行動だけである。少女は、そのグループのリーダーとこの少年の間とで悩み、最後は、車を暴走させて死ぬ、という内容であった。

私はこの映画を三月一日・二日と続けて見ている。不良グループの、反道徳的かつ利己的な言動と、映画全体を貫く無味乾燥なドラムの音が、私の心に響いた。

なにか確実なものを必死で求めようとしていた、当時の自分の姿を思い起すと、今でも、胸がつかまる思いがするのだが。

三月三日、私は会社へ行くつもりで、下北沢駅まで来て、衝動的に反対方向へ行く電車に乗ってしまった。多摩川にかかる鉄橋を渡る前に、電車を降り、鉄橋を歩いて渡った。

その間に電車が来なかったのは、幸であった。線路をはずれると、多摩川の岸辺を下っていった。

私には、もう何も考えるものはないようにも思えたが、一方では、

自分の思いに、しきりに探りを入れていたのかもしれない。自分を苛む目には、ボートに乗っている人たちはいかにも楽しそうに見える。川面に輝く春の陽射しは眩しかった。

多摩川の岸に近い、東横線の駅から電車に乗り、夕暮れの渋谷に出、そこで『シジフォスの神話』を手にしたのである。

本當に重大な哲學の問題は一つしかない。それは自殺である。人生が生きるに値するか否かを判断すること、これこそ哲學の根本問題に答えることである。(12ページ)

これはなんと魅惑的で、衝撃的な書き出しであろうか。武者小路実篤やトルストイの『人生論』を読んでいたのであるが、これらは「人生が生きるに値するか否かを判断すること」、このように直截に、人生の根本問題に切り込んではいなかった。生きる方法とか、満足する方法は教えてくれたが、このことはのまえでは、霧消してしまつた。入居場所Vさえわからずにいる私のよどんだ思念を、このことはまさしく言い当てていてと思つた。

昭和三年の年の暮に、十ヶ月勤めた会社を退め、夜間の大学へ行くため、友人を頼って上京した。心理学や哲學を学びたいと思つていたのである。心理学には、望月衛の『欲望』の影響があつたし、哲學には、よくわからないままに、あこがれていた。

新聞配達などを経て、やつとある会社にはいり、夜間の予備校に通い、受験勉強に備えたのである。しかし、生活は安定しなかつた。空腹の中で、周囲のものすべて、あるべきところにあるように見え、

自分だけが、場違いなところにいると思えて仕方がなかつた。

大学入学をめざしているものの、入学金のめどは、なにひとつたなかつた。親が出してくれるだろうと、かすかな期待がなかつたわけではないが、もともと、動機をやめ、上京してきたのも、親に相談なしの勝手な振舞いであつた。入学試験が近づくとつれ、不安は高じ、生活は安定を欠き、ますます、私の精神を混乱させた。その原因も結果も、自分にあることは知っていたが、明るい見通しは、なにもないようであつた。

突然舞臺は崩れ去る。起床、電車、事務所或は工場での四時間、食事、電車、労働の四時間、食事、睡眠、そして同じリズムで繰返される月火水木金土、この道を人は生涯の大部分安易に迎つてゆく。ただ或る日「何故」が身をもたげ、そしてこの驚きの色に染められた倦怠の中で一切が始まる。「始まる」、これが大切なことだ。倦怠は機械的な生活の諸行為の果にある、だが同時にこれは意識の運動に始まりを與えるものである。その運動に次の運動を喚び起す。次の運動、それは今まで縛られていた鎖の環への無意識的な還歸か、或は決定的な覺醒かである。覺醒の果にはやがて結末が生ずる。即ち、自殺か或は再生かという結末が。倦怠にはもともと嘔吐を催させるような何か内在している。ここでは、しかし、倦怠とはよいものだ、と私は結論しなければならぬ。なぜなら、すべては意識から始まるのであり、意識によつてなければ何一つ價值をもたないからである。こういった注意には少しも獨創的な點はない。むしろこれは自明の事柄である。差し當

つて不條理の發生を概略的に認識する際としては、これで充分というわけである。ハイデッガーが言つているように單に一つの「不安」が一切の源にあるのである。(24ページ)

「倦怠の中で一切が始まる」という。しかし、この「始まる」ということばは、僕に異和感を与えた。「始まる」ではなく、終るのではないか。また、「すべては意識から始まる」という。しかし、意識の過剰が、私を苦しめていると、私は思っていた。

わきあがる想念を、自分自身でもてあましていた。そんな私の手紙に、兄は「軍箱のすみをほじくるような考えをやめよ」と言ったことがある。その兄は、「醉生夢死」と半紙に墨で書き、まだ中学生である私の机の前にはったことがある。酔ったように生き、夢のように死んでいく、このことは私を抑え続けた。醉生夢死でない生とは、どんな生き方なのであろうか。

カミュは、時間への反抗、世界との断絶から、不条理が發生するといひ、さらに次のように述べている。

人間もまた人間的なものを分泌する。或る明晰な時に、人間の動作の機械的な姿、意味を剝奪された人間の無言劇が、彼等ととりまく一切のものを麻痺させる。硝子の仕切り窓の向こうに一人の人間が電話で話している、その人間が何を言つているかはわからない、その身振りは見える、そしてその身振りの意味はわからぬ。この時それを見ている人に、何のためにあの人間は生きているのだという疑問が浮かんでくる。人間自身のもつ非人間性を

前にした時のこの不快感、われわれ自身の存在の姿を前にしてこの測り知れない落下、われわれの時代の一家が名付けたこの「嘔吐」、これもまた不條理である。同様に、われわれが眺め入る鏡の中のわれわれの姿の中に或る瞬間突然現われてくる異邦人、われわれ自身の寫眞の中にわれわれが見出す親しい、しかも何か不安をかきたてる兄弟、これもやはり不條理である。(26ページ)

日当りの悪い、坐り机の前に布団を敷くと畳が見えなくなる部屋で、私は、鏡の中の顔を飽かず見つめ、これはいったい何物であるのか、問い続けていた。明確な答えが出てくるはずもなかった。そのころの日記に、「僕の中に存在する義弘の中の義弘の中の義弘の中の義弘の中の……」と、おのれの尻尾を嚙下している蛇のようなことを書いている。

「懷疑は懷疑を懷疑する」や、この蛇の輪からは、なにものをも生まれはてはこないだろう。私が、この「シジフォスの神話」から、まず、詰みとっていたのは、不条理のムードであった。

三月九日の日記に、次のように記録している。

「コンサート・ホール 十一時まで、音楽に耳を傾け、そして『シジフォスの神話』に読みふける。時々思索の極地におちいる。人間すべて何物もない。あるのは絶望のみだ。その中で無心にヴァイオリンを奏でる者、女とささやきあっている男、声をはりあげて希望の歌を歌う女、それらみな絶望への抵抗であろうと思われた。彼らは絶望であるとは感じない。しかし、人生すべて絶望の希望の連続

だ。絶望の中から逃避するため神を求め、それにおぼれる。絶望を知りながらも、それに触れない為、空虚なる希望を持ち、その空虚なる希望が人間各自の生きがいであるかの如く思い、思わせ虚無なる毎日を送る。そして、それが高じるとあとは情性となる。価値の有無も人生の全ても考えもせず、本当の空虚な生活におちいる。

私は人生との闘争を目的として今日まで生きてきた、形式的に。

しかし今、私はその目的が真に空虚なものであるかを悟った。結局私は絶望の中で虚しい毎日を死ぬまで送るか、それとも自殺をするか、今、必然的に決定をしなければならぬのだ。時間的将来を私は虚しい毎日を送る気力がそれだけあるか。それとも今すぐでも自殺をしてこの現実から逃れる事ができるか。(略) 私は彼らを心の底から笑ってやりたい。いや、逆にわらわれるのは私の方かもしれない。彼らはまがりなりにも、虚しい毎日を(自殺との決定をせまられた上で)選択して生きているのだ。価値のない目的まで持って、そのいじらしさ。(略)」

コンサート・ホールとは原信夫とシャープ・アンド・フラッツなどの楽団が演奏している、新宿にある喫茶店の名前である。食事代にもこと欠きながら、ここへよく行っていた。音楽を聞いたり、映画を見たりしている間だけ、私は、私の目から逃れることができた。三月九日の数日後、ある大学の二部の試験に合格した。家に、そのことを連絡し、あわせて入学金を依頼した。折返し、家から来た手紙には、入学金が出せないこと、それほど大学へ行きたいのなら、こちらへ帰ってきて国立へ行くことが書かれていた。

その夜、私を、一人にすると、なにをやりだすかわからないと、

心配してくれた友人と、新宿の夜の街を、野良犬のように歩き廻った。私はじめであった。東京へ出てくるとき、入学金も貯えるという覚悟でありながら、結局は、親に依存した自分がじめであった。

高校卒業してから、今までの苦しい生活が、まったくの徒労に終わったことを知った。一人になると、涙が流れて仕方がなかった。

しかし、数日すると、異和を感じていた、あの「一切が始まる」ということは、不思議に、浮んできたのである。「一切が始まる」このことは、故郷へ帰って出直そうという形をとりはじめた。

ある年上の友人は、「入学手続きを済ませれば、あとはなんとかなるから」と言ってくれた。その友人は、働くうちに知りあったのであるが、大学の二部に行っている勤労学生であった。私の決心は変らなかつた。

ここにおいて、私には、「シジフォスの神話」は絶望の書から、出発のそれに変わっていった。いろんなものに囚われていた自己、しかし、今はなにも無かつた。ただ自分は生きているということとを冷静に見つめ、そこから歩みはじめなければならぬ。

不条理を不条理として生きる。なにものにも救いを求めずに、自分の不条理を、明晰に見つめ、そこから逃避せずに、つまり確実でないものを何一つ介入させず、確実なものはないものという、この確実さをもって生きねばならない。これが不条理を生きているということである。

カミユは、自殺を拒否する。

意識の働きだけによって死への誘いであつたものを私は生の規則に變える——そうして、私は自殺を拒否するのだ。

(87 ページ)

「生の規則」とは、反抗、自由、熱情である。反抗とは、「人間と人間自身の暗黒との不斷の對決」であり、自由とは、刑場に引かれていく死刑囚の眼前に拡がる、明日はないという自由であり、熱情とは、限られた生の中で、多くのものを感じ取ることである。

すべてが許されている、この宇宙のなかで、私もまた、もはや自殺することはありえないだろうと思つた。私が引きずっている不安なる性情、それは源であり、出発であり、私は私の足で、まず生きねばならない。

不条理の英雄であるシジフォスは、神々から刑罰を受ける。それは、岩を肩にかつき、山の頂上まで、運びあげることであつた。山頂に運びあげられた岩は、それ自体の重さで転げ落ちる。転げ落ちた岩は、シジフォスの労働によって、再び運びあげられなければならない。これは、休みなく、永遠に続く、無意味な刑罰である。

カミュは、次のように書いている。

この下山、この休止の間、これが私にシジフォスへの関心を與える。疲れきつてかくも石に近づいている顔はもはや石そのものだ。私はこの人間が、重いけれどもしかし亂れぬ歩みで、終りの知られない苦惱にむかつて再び降つてゆくを見る。いわば呼吸作用のようなこの時間、シジフォスの不幸と同じ確實さをもつ

て戻つてくるこの時間、これは意識の時間である。彼が頂上を離れて少しづつ神々の住居の方に降つてゆくこの時、シジフォスは各瞬間毎に自分の運命に打克つのだ。彼はその岩よりも強いのである。(略)そして山を降りる間中彼が考えるこの悲惨な條件なのである。彼を苦しめたに違いない明視が同時に彼の勝利を完きものとする。悔蕪することによって克服されない運命はないのである。(164~165 ページ)

そして、運命は「すべてよし」と享受される。

二〇歳になつたばかりの当時の私が、運命を「すべてよし」という境地を理解できたとは思えないし、また、現在の私も、手の届かぬものである。しかし、感傷的ではなく、冷静に、周囲を、自分の心の動きを見れるようになったようである。これからは、いたずらに、自己を苛むことはないであらう。

故郷に帰つて間もないころ、私をよくかわいがつてくれた、近所のおばさんが「苦勞して勉強しただろうに、本当に残念だつたね。」と涙をながさんばかりに言ってくれた。そのとき、私は、「いいえ、いい経験になりました。」と、心底から言えたのであつた。私に申し分けないと思つている両親にも、同じことを言つたのであるがうまく伝わつたのだろうか。「シジフォスの神話」に出会わなかつたならば、「いい経験になりました。」とは、言えなかつただろう。

こうして、故郷での、国立大学を自ざして、受験勉強がはじまつた。

次の年に佐賀大学文理学部に合格し、昭和四〇年に卒業した。とりたてて、なにかをしたいということもなく、本を読んで暮せるだろうと、教師を志望した。卒業と同時に、有田焼の積出し港として有名だった伊万里の商業高校に、国語教師として勤めていた。

二年目で少し慣れてきてはいた。しかし、毎日、生徒の間を走り廻り、自分の心が、しだいに乾燥し、ささくれだっているのを感じていた。私は、教室にいても、職員室にいても、伊万里の町を取り囲んでいる山々、腰岳、国見岳、大平山ばかりを見ていたようだ。秋の一日を、次のように日記に書いている。

「何が原因で、ぼくはこんなに疲れるのだろうか。新聞を読みながら、ページをめくるのさえ大儀である。そして、必ずそのままぐ深い眠りにおちてしまう。なんということだ。わけのわからぬ不快な疲労感に、ぼくはすっぱりまとわれている。今日も職員室から、青い山々を眺めていた。タバコが順調に体内をめぐっているようだ。放心。職員室の雑踏も生徒たちの喧騒も入ってこない。たれも侵入してこない部屋に疲労感だけが寛いでいる。」

また、別の日に、書いている。

「微熱が続いているように思える日々。体温計を手にしりたいと思いながらも、何もせずすませようという日々。微温的な日々のかに、ぼくたちはびっしりつまっている。どうすれば、こんな現状から、もうひとつの新しいさにみちた状況へ移行できるのか。わからぬ。不愉快さだけが蓄積されてゆく。ぼくは、ぼくの世界が構築

されず、抛り出されているという思いに、たえず辱しめを受けているようだ。この思いはどこでどう集くったのかわからない。

今日、Fから借りていた「贈る言葉」(柴田翔)を読了する。「十年の後」「贈る言葉」人生に、たえず、新しい世界を求めて生きていながら、そのことによって、自分を傷つけ、相手を傷つけてしまう。そして、結局なるようにしかならない現実の前で、叫びだす前に、自分を傷つけてしまう主人公たち」

こんな状態の私の前に、生徒たちは、さまざまな問題をなげかけてきた。

家での、いやな思いに耐えて、学校に来てはいるものの、突然泣きだしたりする女生徒と、日記を交換しながら、私は自分の非力さを知らされていった。私には測り知れない現実のなかで、生きていく生徒たち。

また、離婚した母に付いて、転校していった女生徒が、家出して伊万里へ戻ってきた。彼女は、「いちばん嫌いな父に、自分がだんだん似てくるのがたまらない。死んでしまいたい。」という。預けていた女の先生から、彼女が、深夜死ぬとあって、部屋から飛び出したという連絡を受けた。霜降る夜の伊万里の町を、その先生と探し廻った。幸い、見つけることができたが、これまでに、これほど他人の生命に、思いを馳せたことがなかったことに、私は気付いた。そのうえ、私はある女友だちに傾斜していく、自分の思いをもてあましていた。自分の心を「認識の灰神楽」などという言葉で表現してみた。彼女の欠点を、冷静に数えあげること、せつない思いを消そうと試みた。しかし、そのことは、逆に今まで以上に、思い

をつのらせることにしかならなかった。

あちら、こちらとエネルギーを注ぎながら、私は自分の内側が、しだいに空洞になっていくような恐れをいだいた。私の生活は単調であるかのように見え、実は、生徒ひとりの生活にしても、私自身の胸の内にしても、深いものがある。しかし、それは確かなものとして見えてこなかった。

こんなとき、森有正の「遙かなるノートル・ダム」に出会った。

自己の促しというものは、本質的には、そういう（小松注）日本とその文化を定義しても、一個の人間としての個人というものをすこしも定義してはいないということ。非個人的な傾向に對立するものである。非個人的と言っても、具体的な経験が開始される時、各個人の中に働く促しの実現をばむ要素として個人の内部に自覚される外はないのであって、経験はそういう自己の内部における対立を本質的に含むものであり、それを超克して促しの指し示すところに赴き、冒険に身を投ずること、またその結果なのである。私がしばしば引用する句をもう一度引用することを許されるならば、それはアランの言う「自己の自己に對する対立」であり、パスカルの「自己の自己に對する同意」なのであって、両者は同じことを意味しているのである。（21ページ）（傍点は著者のもの）

促しというのは、出発点であり、「欲望とは根本的に異なるもの、いな、はじめは欲望と混在して見分けがたく働いていても、やがて

それと鋭く分離しはじめもの」（21ページ）である。その促しによって、ある対象が感ぜられるようになるかどうかは、予見できないが、それまでになるには、忍耐が要する。予見できないが、忍耐する、これが冒険である。感ぜられるようになり、経験が始まる。経験とは、一個の人間を定義するものであり、直接指示可能な体験と峻別され、ある行為、あるいは文学や芸術の創造行為によってのみ、表現可能なものである。

促しから冒険を通して真の経験へ、これが今の私には思想に到る唯一の道であるように思われる。（18ページ）

私は確たる思想がほしい。「シジフォスの神話」によって、広いところへ導かれた。自分で思想を確立しなければならぬことも、教えられた。そこから、どのような足どりで歩みはじめるとよいのか、私にはわからなかった。

毎日の授業、そこで出会う生徒、その人生、その日常のあり方、それに触れる、私の、学校での仕事、それに無関係でない、私の生活、その基盤、それらはすべて切り裂かれているように思えた。

就職していく生徒の涙を、見送る生徒たちの肩越しに見て、とても美しいと思った。そこに、私が真に見ていたものは、私が高校を卒業し、就職して体験したもの、ある大きな自動車工場の流し作業の、嫌悪感で身震いした光景であった。しかし、そこにも人生はある。

切り裂かれている、私の心象を、貫くものを創る方法を、森有正

の「遙かなるノートル・ダム」は与えそうに思えたのであった。

自分をつき動かすものを、疎かにせず、自己の内部での対立を大切にし、その対立に耐え（これは重要なことだ、見つめ続ける。そして、言葉にならぬものを、把握し、ひとつひとつ自分の言葉で定義をする。

こういう努力は、日常生活を豊饒にするであろう。容易なことではないけれども、性急に生きようとする生徒たちにも、必要なことであると思つたのである。

4

次の文章は、求められるままに書き、昭和四四年三月三日、讀売新聞、佐賀版に掲載されたもので、題は「闇」である。

高所恐怖症というのがあるが、広所恐怖症というのではないのだろうか。八幡岳の山ヒダのなかで育つたぼくは、広いところ、たとえば天空をグルリと見廻せる平野とか、島影ひとつ持たず、かすんでいて、その境界さえはつきりしない海のかなたとか、底がそこにあるようで深い深い紺ベキの空とか——を見たとき、背すじをなにかが走り、身震いする。それは次第に悲しみとなる。

透視を心得ている人もいるらしいが、その人にとって、なにもさえきるものはないのだからたえず恐怖に襲われているのではないだろうか。すかして、いったいどんな色を彼はみるのだろうか。

透視を心得ていないぼくは、狭い部屋とか、あるいは、なにか自分の身体をすり寄せるものがあれば恐怖はなく、くつろぐことだっ

てできる。

ところがある夜、不思議な夢をみた。落下しているのである。途方もない闇を落下しているのである。しかし、実際は落下しているわけではなく、落下しているという気持ちばかりをとらえ、なにか、すがりつこうとするが闇ばかりである。足もとさえも。

この夢をみたのは、金子光晴の詩集「IL」を読んだ直後であった。こわいもの見たさであろう。それから、闇の広がりをはくに感じさせる作品ばかりを読むようになった。その作者が、持っている闇をどのようにひねり伏せているのか、読みながら気にするようになった。ロートレアモンの『マルドロールの歌』を読んだときなど、しばしばあの夢の恐怖がぼくを襲い、本を閉じなければならなかった。

梶井基次郎の作品に出てくるドロボウは、棒を持って闇のなかを突っ走る。現代の学生の一部は、ゲバ棒を持って闇のなかを突っ走る。ドロボウにとつて、闇は生活の場であるが、学生の一部にとつて、闇はいったいなんだらう。

昨今のニュースは、どれを読んでも、ぼくに闇を感じさせる。ニュースはひとつひとつ関連しているように思え、闇は巨大な塊となっていく。

「フてふてふ」っていいな——といったらおしまいだ」と言っていた友人は、いまの闇をどんなヒトミでみているのだろうか。

安田講堂のあのニュースを見ながら、ぼくは広い広いところにはうり出されているのを感じ、恐怖にうちのめされていた。

当時、新聞を読みながら、時代の歯車がひとつ回転していることを、強く感じていた。私の勤める高等学校でも、田舎であるとはいえ、無関係にすまされるものではなかった。

前の文章を書いて、二年ほどして、内田義彦の『社会認識の歩み』に触れた。最初、内田義彦の名前に出会ったのは、確か加藤周一の『羊の歌』(岩波新書)だったと思う。また、森有正の本に接しているうちに、戦後間もなく、内田義彦から、森有正らが、『資本論』について、講義を受けたことを知った。

『社会認識の歩み』が刊行されて間もなく、学校図書館の新刊コーナーに並んでいたのを、読み始めた。これまでに、社会科学に関する本は、大学の一般教養の教科書以外には読んだことがなかった。その私にも、容易にはいっていったのは、この本が、岩波市民講座での講義をもとにして、書かれていることによるだろう。そして、当時の、私の精神の方向とも関連しているだろう。

昭和四四年四月に、伊万里より唐津の商業高校へ転動した。転動はそれまでの教師生活を反省するのに、いい機会である。国語の教師として、学級担任として、国語の授業を、学級運営を、ただ、我流で、試行錯誤をくり返しているだけであった。それらのことについて、あるいはもっと広く教育ということについて、何か背骨になるものを欲しつつも、日常生活のなかで、単発的な体験を重ねるだけであった。

このことは、私ひとりではなく、同僚である三十歳前後の教師たちも、同じであった。そして、その思いは、サークルとなり、研究会となり、『飛翔』という機関紙の発行となった。

『飛翔』の「巻頭のことば」を、私は次のように書いている。

「われわれは教師であるということ強く自覚するものである。われわれは、教育について、同じ考えを持ってはいない。ただ、われわれの共通の地盤があるとすれば、それは、若さと情熱と、何かなさねばならないという、教育についての切迫感であろう。

これらのことは、われわれが動きだしたとき、明確なものとして、各人各人の胸のなかにあったのではない。しかし、動きだすことで、これらのことはことばとなり、新たな若さ、情熱、及び切迫感を生みだしたようである。形として、この誌になった。

これを契機として、われわれは前進しよう。前進するとは、また一段と深い問題に立ち入ることである。」

しかし、『飛翔』は一号しか出なかった。「教育について、同じ考えを持ってはいない。」と書いたが、当時出された『高校生の政治運動について』(文部省通達)、クラブ活動の問題点、高校の単位制などの研究会を開くにつれて、会員たちの考えの違ひは、しだいに明らかになっていった。私の転動と入れ違いに退職された教頭のことば——青年部は酒ばかり飲まず、教育哲学を確立するように、あらゆる勉強をすべしだ。その後での酒代だったら、私が持つ——を、いかに真剣に受け取っているかにも、違ひがあった。中教審答申の輪読会、その後行なった『日本の教育はどうあるべきか』(教育制度検討委員会)の輪読会に参加するものは、しだいに限られてきた。

『飛翔』に、また、「問う姿勢」と題して、次のような文章を寄せている。

「これは、どんな時代においても、必要なことだと思われるが、とりわけ、現代において、いろんなことを根本的に問うことが必要であると思う。」

なぜならば、現代社会は、現象的には、非常に流動的に見えるが、それに対する、あるいはそのなかにいる人々の心のなかに、固定化が根をおろしているのではないかと思われるからである。自分と他者とのつながり、そのつながり方が、できあいのものによって、なされている。言いなおせば、人間を取り囲む社会は流動的であるのに対して、人間は、自分自身の言葉でそれを認識しようとはせず、既成の言葉でとらえようとする。

根本的のごとを問う姿勢。これは正しいか、否かということ、慣習的に、誰でもが広く認めているからというようなことを規準とするのではなく、自分自身の眼で考えることである。ただここで、謙虚ということ忘れては、何も見えてこないと思う。

就職のための学校教育、進学のための学校教育というのではない。真に人間であるための学校教育を根幹にすえて、教育を考えねばならないことは、言うまでもないことだと思う。そのとき教師自身は、現代社会のなかで、社会と人間、歴史と人間、あるいは真に人間的事であることはどのようなことか、ということをも根本的に問い続ける姿勢を持つことが必要になってくるであろう。また、学校全体もそうであらねばならない。学校教育は、なにかのためになされるものであるが、現状では、なにかの部分に既成のものがつまこまれている。なにかということ問い直さねばならない。

『読書感想文指導の基底』（仁木ふみ子著）のなかで、フランス

の詩人、アラゴンの詩の一節、

△教えるとは希望を語ること

学ぶとは誠実を胸に刻むこと▽

を、モットーとしている学校があることを知って、私は感動した。問うことから始めて、希望を創造しなければならぬ。そこで、はじめて、なにかの部分に生き生きとしたものが、こめられると思う。

問うこと、創造すること、希望を語ること、この三つのことを忘れた教育が、どのようなものであるかは言うにおよばないであろう。アラゴンの詩章をモットーとして掲げている学校があることを、本で知り、感動した私は不幸である。教師になり、今までに教育の場で味わっておかねばならなかったのではないか。

生徒たちは、簡単にいえば、流されている。また、流れにさからう生徒たちは、根本的に問うことを忘れ、既成のものでその空白を埋めるか、あるいは、破壊という情念的なもので、やはりその空白を埋めようとしている。

ひとりフトンのなかで、毎晩、ラジオの深夜放送を聞いている生徒。

「なにもしなくてすよ。オートバイに今乗って、どこか遠いところへ行きたいだけです」と、私の問いに答えた生徒。

私や生徒を取り囲んでいる状況は、真に人間であることを問う暇もあたえないような有様であるが、また、マスキミの流れのなかで息をしている生徒たちは、すでになにか疲弊しているようだが、私は、まず問うことからはじめよう。」

ものごとを問うといひながらも、問う方法も明確に持つておらず、日常の事がらを処理するのに、手いっぱいというところである。そして、その日常の事がらの処理は、また私から、ものごとを根底から考えるという姿勢を奪つていくようにも思われた。

方法について、内田義彦は「方法論」とメソドロジー」の章で、次のように述べている。

方法的に考えることは、あるところまでは、だれだつてやっているんです。方法の総体だつてどの仕事にもありますし、方法そのものを、方法の底にあるプリシプルを、さらには、その仕事にたずさわっているものの間では通念というか、暗黙のうちにとめられている一定の前提そのものをあらためて吟味することも、哲学とまではいかなくても、その萌芽としては、すべての人がやっております。でなきゃ、およそ仕事にならない。ことによるとある学問あるいは哲学の分野のなかに閉じこもつて方法学に専念している人より、もっとメソドロジーに通じているのかも知れません。さいしょ、集まつてある仕事をしてゆくためにこれだけはお互いに認めておかねばという形でできた「前提」が、しらぬまに暗黙の前提になり、いつしか人をもしはるようになる、ということは常にあることです。事実、偉い人の仕事を見ておりますと、テーマもそうですけれども、考えるところという操作自体、普通の人々が日常やっている日常性批判の方法をよく見て、それから教わるというか、それを土台にするというか、それをさらに批判しながらというか、とにかく、それとかかりを持ちながら仕事をする

進めていることに気がつきます。(25ページ)

(傍点は著者のもの)

学校の仕事も内規があり、前例がありで進められる。これらがなると、現実的に仕事が進まないのがあるが、これらは「いつしか人も仕事をもしはるようになる」ことが多い。ひいては、一人一人の生徒を見る目も、くもるといふこともでてきたりする。

著者は統けて、

われわれは、出来上つた諸学問の方法論ではなくて、むしろそういう学問の仕方の仕方そのものを教わらなければならぬでしょう。学問的方法をとること、いままで見えなかつたものがどう見えてくるか。常識や通念を破つてものを見る操作を知ることが肝要であります。(26ページ)

と述べ、この学問的方法は、

われわれのなかにある学問的芽を育てるためのものです。ところがわれわれの学校教育は、いろいろの学問、あるいは、いろいろの学問の方法は教えるけれども、学問的方法そのものを中身に即してじっくり育てるといふふうになっていません。(27ページ)

と書いている。

私は、これを読んで、以前読んだ、フランスの哲学者、シモーヌ

・ヴェーユの伝記の、人間が「根」をもとうとするとき、その根を断つ作用(根こぎ)が、社会の中にはいろいろあるが、学校教育もそのひとつだ、という内容を思い起した。前出した「読書感想文指導の基底」の著者・仁木ふみ子氏も、この著の中で、シモーヌ・ヴェーユのことに触れられていた。そして、このことは、私の胸に突き刺ったままになっている。

方法、すなわち method は、秩序だったやり方と学問の方法という、二つの意味を持っているのであるが、日本の場合、この二つの意味が大きく隔たっている。つまり、日常生活のなかの言葉と、社会科学という学問の世界に用いられている言葉とが切れている。

ここに、社会認識を阻むものがあるという。このことは、ただ社会科教師の役割だけにとどまらない問題を含んでいるのではないだろうか。学問の世界と日常の世界との接点に立つ姿を、高校教師に重ねるとき、高校教師の仕事のいかんによって、この二つの世界をますます両極に拡げてしまうことにもなりかねないだろう。

授業のみでなく、クラスのこと、生徒会のこと、問題は多い。数少なくなったサークルのなかで、クラスをどのようにとらえるか、意見が分れた。クラスは、便宜的に集められた、単なる集合体ではなく、有機的なつながりをもったものにしなければならぬというもの。それに対して、単なる集合体ではないか、拘束されれば逃げだしたくなるのではないか、という意見に分れた。つまり、内田義彦の言葉を使えば、クラスを、ソウル(共通の意志)をもったボディ(人間集団)とみるか、ソウルをもたない単なるボディとみるか、の違いであった。この違いは、人間をどのように見るかにかかわる

深い問題である。

私は社会科学について、まったくの無知であったが、この「社会認識の歩み」から、多くのものを読みとろうとした。人生論とも、文明批評とも、教育論とも、また読書術とも、読むことができた。それらが渾然一体となっており、私は詩を読むように、行きつどもりつして読んだ。

本の読み方について、次のように書かれている。

まず新鮮に断片を読むことが、つねに大事です。むろん断片だけにとどまっては困るので、断片の読み方も体系のなかにその断片がどうはさまっているか、体系の理解が断片の読みの深さを規定します。しかし体系の理解そのものが、やはり断片をどう理解するかということにかかると。体系に埋まっている断片をあえて掘りおこすという作業をしなければ、体系的に理解したとはいえません。(116ページ) (傍点は著者のもの)

「新鮮に断片を読む」ことは、断片を自分の眼で、身につまされる形でとらえることである。それはまたひとつの賭けである。「賭け」という日常語は、また、「一人一人が賭けをする存在になると、そこから客観的認識が出て来ざるを得ない」(46ページ)という、社会認識の第一歩に、逆上って結びついていく。

「断片を読む」ことは、本だけに限らず、この現実を把握する際にも必要である。例えば、新聞の記事という断片。ひとつの新聞記事と事実とはどうであるかを追求する。つまり断片を読む。そのこ

とで、その新聞の思想（体系）を知ることができる。それは、さらに断片をより深く読みとることになる。

私の生活を取り囲む学校で、学校とは無関係でない社会で、出来事はめまぐるしく生起する。その煩瑣な出来事を、いかに読みとっていかか、今からの私の精神にかかわる問題である。

前にも述べたように、教師であることの背骨を持ちたいと思っていた私に、この書は、直接答えたわけではない。しかし、私に新たな窓を与えてくれた。この窓は、まだまだいろんな風景を、展開してくれるように思えるのである。

5

私は、三つの書物に接することで、自分の精神のありようが、ほんのわずかであるにせよ、カタンと回転したように感じたのであった。

本との邂逅とは、どういうことであろうか。本は私の乱雑な胸のうちを見すかし、それに言葉を与え、整理してくれるかのようである。このことを逆にいえば、そのとき、そのときの私の混乱が、身につまされるように、本に出会わせてくれたともいえるであろう。

その混乱も、変貌していく。

『ジジフォスの神話』に出会ったときの私は、自分で自分の生活を、性情をもてあましていた。「遙かなるノートル・ダム」に巡り合ったとき、他者との関わりによる混乱の中で、自分を見失いがちになっていた。『社会認識の歩み』のとき、教師であることを強く意識しはじめていた。そして、生徒集団を、社会を、教育をとらえ

ようとして、とらえられない、いらだちがあった。

これらの混乱はこれからも形をかえ、あるいは新しい混乱は、私を襲うであろう。しかし、その運命をよしとし、それに耐え、おのれを経験まで深め、社会を認識する道すじが、わずかながらも、わかりつつあるようだ。いや、いちばん重要なことは、これからの歩みを、私を取り巻くものを、私自身の言葉で定義することを教えてくれたことである。これはまた厳しく、険しい道である。

詳しいことを忘れたが、森有正の顔をテレビで見、ある人（辻邦生氏だったか）が、その顔が岩のように見えたというのを聞いたことがある。即座に、ジジフォスのことを、私は思い起したのである。私は、森有正が、内に外にむかって、ひりひりするような感覚を、いかに大切にしている人であったかを知っている。その帰結が、岩のような顔だったのだろうか。

私は、道がまだまだ遠いことを、思い知るのである。

（一九八〇・三・三）

（佐賀県立唐津商業高等学校教諭）